

伊那谷は南アルプスと中央アルプスの間にある。天竜川と飯田線の線路と国道が並走し、時に交叉している。子供たちは、夏の日には天竜川で泳いだ。泳いだ後で水泳パンツを脱いで履き替える。友達に見られるのは子供心にも恥ずかしいので、土手を超えて向こう側で隠れてパンツを脱いだ。その時に飯田線の電車が走ってきて、全裸の少年は電車の窓からのぞく乗客の目にさらされる。そういう構図になっていた。

私が出た伊那北高校は中央アルプスのふもとの高台にあった。

霜が降りて、柿の葉が落ちる頃、我が伊那北高校では駅伝があった。

私は走るのが遅かった。昔は勉強ができる子供は運動神経が発達していなかった。この頃は頭の良い母親と、運動ができる父親が結婚して、どっちもできる子供が生まれるようになったらしい。

それはそれで結構なのだが、一方で、勉強が嫌いで足の遅い子供ができていのではないかと心配している。優秀な子供は一握りで、優秀ではない子供たちが量産されているのではないかと、この頃の大学生をみていて思う。

私は、駅伝の選手の傍らを自転車で走る役割であった。

選手たちは校庭から一斉に走り出して校門を出た。そのうちに優劣ができ始め次第にトップと尻尾の差が開いてくる。遅い者は引き離されて孤独になる。道端に誰もいない

砂利の道を走る。埃の道をただひたすら走る。

早い子も孤独に走るが、トップであることに自尊心があり疲れを感じない。

コスモスの咲いている道をそれぞれに懸命に走る。

そうこうしているうちに飯田線の踏切がある。天竜川の西にある高校から橋を渡り東へ向かうので、飯田線をまたがなければならない。トップは、運悪く遮断機に遮られてしまい、前に走っていけない。

昔は遮断機が降りている時間が長かったような気がする。

イライラしている間に、2番の子が到着する。そういう時は友達であっても会話をしない。そして3番目も4番目も到着する。自転車の私も到着。待つこと数分、皆で電車の過ぎるのを待って遮断機が上がってスタート。

そして長い距離を走り、バトンが受け継がれて差ができた頃に、天竜川を東から西に横切る時に飯田線の踏切に再び出あう。

そこでまた遅い子が来るのを待って、皆で走り始めた。

それが、あの頃の教育であった。

